

# 江戸初期のキリスト教と島原の乱

アルベルトウス・レガ・セティアンネス

## はじめに

島原の乱というのは1637年から1638年にかけて、肥前（長崎県）、肥後（熊本県）、天草地方に起こったキリスト教徒による農民一揆である。当時の領主の圧政に対して農民たちが闘争を行った。この反乱による領民の犠牲は3万7千名に上ると言われている。本研究を通じて、江戸初期のキリシタンはどんな風に生活していたのか、島原の乱はどんな反乱であったのかを詳しく知りたいと思う。

## 1. 日本キリスト教史

キリスト教を日本ではじめて正式に布教したのはフランシスコ・ザビエルだと言われている。ザビエルはイエズス会の創設メンバーの一人で、当初西インドで宣教活動に従事していた。マラッカにいる時、ヤジロウという日本人に出会って仲良くなり、日本のことを聞いた後、日本のことに興味を抱くようになったことが日本における宣教活動のきっかけになった。ザビエルが日本に来たのは1549年だと言われている。最初は鹿児島に着いた。ザビエルとやじろうの宣教活動は2年3ヶ月にわたったと考えられる。天皇の宣教許可を獲得するため、ザビエルは鹿児島から平戸、山口を経て、京にたどり着いたが、ザビエルにとって残念なことには、当時、京都は戦国乱世の真ただなかであった。結局、京都まで足を運んだものの、天皇の権威も失墜しており、室町幕府十三代将軍である足利義輝にも会うことができず、目的を果たせなかった。当時、言語や文化の違いなど多大な困難を乗り越えながら、何人かの日本人協力者に出会ったおかげで、七百名ほどの日本人に洗礼を授けた。二年半の日本滞在ののち、ザビエルはインドのゴアへ戻ったと言われる。そして、日本文化に中国が大きな影響を与えていることを認識した後、ザビエルは中国宣教を志し、マカオの南にあるサン・ジョアン島に上陸したが、目的を果たせず、病を發し、客死してしまった。

ザビエルが死亡した後も、イエズス会の宣教師が続々と九州へ派遣されているが、この活動は貿易と一対のものであったと言われている。当時、宣教師が、貿易商に布教のための費用を負担させたり、あるいは教会が布教のために貿易商に資金を託すということが行われた。ポルトガル人は日本との貿易を、ナウ・ダス・プラータス（銀の船）と呼んだ。これがポルトガルによる南蛮貿易の本質であった。

九州の大名たちはポルトガル船を歓迎し、キリスト教との接触したことで、キリスト教に入信する大名たちが現れた。彼らは洗礼を受け、キリシタン大名と呼ばれるようになり、その保護のもとでキリスト教が普及する。南蛮との貿易をより円滑かつ大規模に行いたい、

あるいは南蛮の文化や科学技術を習得したいという理由でキリスト教に入信したものもいたと言われる。豊臣秀吉が禁教令を発するまで、九州ではキリスト教が急速に発展した。日本で初期にキリシタンとなった大名は、肥前(長崎県)の大村純忠だった。

## 2. キリスト教が禁じられていた理由

キリシタン大名の政治のもと、洗礼を受け、キリスト教に帰依する領民が急速に増えていった。しかし、彼らの統治のもとでは、仏教徒などの異教徒がキリスト教に改宗するように強制され、迫害を受けていたといわれる。豊臣秀吉は、当初、キリスト教を黙認していたが、九州征討の折に、長崎が教会領となっていることを知り、九州がいずれポルトガルの植民地となるのではないかと懸念した。そこで、1587年、博多で禁教令を発し、宣教師を追放し、禁教政策に転じたという。それだけではなく、宣教師とキリシタン大名が行った信仰強制や奴隷売買なども禁教令が発された理由となったと考えられる。

### 2.1 宣教師とキリシタン大名による信仰の強制

1590年、豊臣秀吉は日本にふさわしくないキリスト教の邪法を広めるイエズス会宣教師の追放を宣言し、領主が住民にキリシタン信仰を強制することを禁止した。それにも関わらず、秀吉に重用されていたキリシタン大名である小西行長の領国では、伴天連追放令は大して意味をもっていなかった。キリシタン信仰に帰依しない者が追放され、処刑されていたのである。

天草の人々は行長の政治のもとで、キリシタンに帰依するとともに、領民の間にあるキリシタンのでない要素を自ら摘発するようになっていったようである。とはいえ、行長の政策により、領民の信仰が簡単に変えられていったわけではない。上津浦では、一向宗信仰も盛んであった。当時、一向宗信者の老婆をめぐって仏教徒とキリシタンとの軋轢が生じた。この老婆は熱心な一向宗信者であり、キリシタン宗門が盛んだった時期には仏像を隠し、こっそり仏像を祀り、多くの信者を集め、扇動的な説教を行っていた。キリスト教の布教を行う若者がこの老婆の活動を知り、老婆から仏像を取り上げたが、報復のために一向宗の信者百二十人ほどが武器を携帯し、若者の家にやってきて仏像を返さなければ、皆殺しにすると警告した。若者も、やってきた一向宗の信者たちに、領主である小西行長の命令に従い、キリスト教に帰依するがよいと応戦する。とうとうこの出来事は行長の奉行たちの耳に達した。小西行長は、直ちに犯罪人である「一向宗の信者」にしかるべき罰を与えることを決定した。これを知った一向宗の人々は恐れに駆られて上津浦の司祭に慈悲を請いに行った。老婆は殺されることを恐れ、その直後姿を消した。奉行らは異教徒への見せしめのため、老婆の家を焼き払ったが、ほかの一向宗の信者については司祭の嘆願のおかげで、罪を赦されると公言した。赦された者は洗礼を受け、きわめて従順になった。この出来事からも、キリシタンが行った異教徒への信仰強制は明白だ。

小西行長の統治の下では、キリシタンへの改宗が督促され、改宗した人々が度々寺社への攻撃を行っていたと言われる。このような信仰の強制により、確かに改宗する人が多かったが、このキリシタンへの帰依が自発的な意思なのか非常に疑わしい。栖本という町である僧侶が洗礼を受けたが、これはうわべだけのことであった。この僧侶は改宗者を惑わせるために栖本の村々の純朴な農民や小作人に邪宗やを吹き込み、扇動的な説教を行っていたと密告されて、小西行長につかまり、処刑された。

有馬晴宣は過去に一度棄教した住民たちに、改めて宣教師の説教を聞き、キリシタンへ立ち帰ることを強制していたと言われる。それだけではなく、異教徒にも説教を聞くことを命じ、どうしても改宗しない者に対しては、領国のためにいくら役立つ有能な人材であっても、領内から追放することにした。

三会という村では、篤い信仰を保持している僧侶も何人かいた。彼らはキリストの布教や異教徒が改宗することを妨げ、また、キリスト教に入信した村民がその僧侶たちからの差別的な扱いを受けているとフロイスが言った。この村ではすべての墓地が異教徒のものだったが、ある日キリシタンの死者を埋葬する時、そこにキリシタンが十字架を立てた。それを知った僧侶たちは直ちに死体を掘り出すことを要求し、そうしなければ死体を犬に与えると脅迫した。有馬晴宣はこれを聞きつけ、そのような行為は処刑に値すると警告し、僧侶たちの財産を没収した。恐れに駆られた僧侶たちは司祭たちにキリシタンの律法を教えることができる人を送って欲しいと伝えた。彼らは説教を聴いて、すぐ洗礼を受けた。その出来事の後、瞬く間に千人以上の人々がこの村で改宗することになった。

このような記録を見れば、当時、多くの人々がキリスト教に入信した原因は領主であるキリシタン大名と宣教師たちが行った信仰の強制のためだと容易に理解できる。

## 2.2 キリシタンの行う寺社と偶像の破壊

キリシタンの布教を督促するために、キリシタン大名は異教徒が祀る偶像と寺社の破壊を行っていた。しかし、このような行為は宣教師の進言から起こったものだと考えられる。

追放されることになった僧侶たちは有馬晴宣の領内から立ち去るまえに、ある洞窟に祠を造り、仏像を隠したのではないかと疑われた。それを確認するために、宣教師たちはその洞窟に入ると、疑いの通り、祠や偶像を見つけた。そこで彼らは取り出せる仏像は総て取り出し、残った大きな仏像を祠や祭壇もろともに焼き払った。

キリシタン大名の一人である大友宗麟は日向国に侵攻した時、日本の神仏の社殿堂宇を破壊したと言われる。当時、同行した宣教師の報告によれば、大友宗麟は日向国にキリシタンの教を植え付け、キリシタンとポルトガル人の法律で統治したいと語った。その時、仏僧の寺院で行われた破壊はもの凄く恐ろしいものだったという。宗麟の軍勢は容赦なく寺院と屋敷を解体し、中にある偶像を残らず打ち壊した。これを恐れ、他の領地へ逃げる僧侶もいたが、殺されないように、仏像や寺院を自分の手で破壊し、キリシタンに服従し

た僧侶もいた。キリシタンによる破壊活動により、宗麟は神仏を侮辱し、僧侶たちを強制的にキリスト教に入信させたという。また、破壊された寺院や偶像から得た材木はキリスト教の教会建設のために使われたと考えられる。

ところで、何故大友宗麟は日向国に侵入した時に、それ程の破壊活動を行ったのか。やはり、それは宣教師たちの扇動的な発言から生まれたのだろう。耳川の戦いで島津義久の軍勢に敗北した大友宗麟は豊後へ敗走した。その時、宗麟の陣所へ訪れて来たのは宣教師たちだった。宣教師は宗麟に「敗北したといっても信仰は揺るがず、むしろもっと強くなるはずだと言った。こんな時こそ、デウス様への感謝を捧げる必要があると忠告した。その義務を果たすために、異教徒を迫害し、占領地でキリストを宣教し、ポルトガルの法に従って統治し、寺社や偶像を破壊したという。

日本最初のキリシタン大名となった大村純忠も伊佐早との抗争に勝利した時、デウス様へ感謝を捧げるために、自分の領内で偶像礼拝や崇拜を徹底的に根絶したと言われる。これをデウス様への最大の奉仕であると、当時の宣教師の一人であるガスパル・コエリヨは高く評価している。

1580年頃、有馬晴信と竜造寺隆信との軋轢がひどくなった。その時、竜造寺に抗するために、宣教師からの援助が必要だと考えた晴信は宣教師であるヴァリニャーノに親類と領内の異教徒たちに改宗するよう、説得することを約束したが、ヴァリニャーノは晴信に自分の領内で寺社破壊を行うことも求めている。宣教師の軍事援助のおかげで、有馬晴信の軍勢はより強化された。しかし、その一方で、竜造寺方との和睦が成立し、やがて晴信は苦境を脱出した。この苦境を脱することができたのは宣教師の援助のおかげだと思った晴信は宣教師に感謝の気持ちを表すために、自分の領内で偶像や寺社の破壊活動を行ったと言われる。

これらの出来事から見れば、当時、異教徒が改宗するよう、迫害を加え、偶像や寺社の破壊を行うのが、デウス様への奉仕だと考えられていたことがわかる。それ故に、キリシタンは躊躇せずに、異教徒たちを弾圧していったのである。このような考え方は本当のキリストの教えとは全く異なる。キリストの教えでは、どんな理由があっても、人を傷つけること、殺すことは禁じられている。そればかりではなく、キリスト教の信者として、自分を愛するように敵を愛する義務がある。このように考えると、その頃、布教されていたのはキリスト教ではなく、邪教であったと言えるかもしれない。

### 2.3 宣教師の習慣である牛馬の肉食

牛馬の肉食禁止令は伴天連追放令と共に発された。その理由については様々な説がある。九州にキリスト教がひろまるにつれて宣教師の習慣の1つである牛馬の肉食も普及してきた。当時、馬と牛は人々の生活に役に立つ動物として、その肉食は避けられていた。が田畑を耕すには牛が必要で、馬は兵士の乗り物として用いられていた。それを考慮した豊

臣秀吉は牛馬の肉食禁止令を発した。しかし、ずっとその前から日本人は既に牛馬の肉食を禁忌していたと考えられる。飛鳥時代には牛、犬、馬、猿、鶏の5種類の肉の食用が禁じられていた。とは言え、それ以外の肉は禁令に触れず、自由に食べられていた。そして奈良時代にも農耕に役立つ牛馬を屠殺の禁令は依然として続いていた。キリスト教に入信した領民たちは宣教師の影響を受けて、肉食についての法令を無視して、牛馬の肉を食べるようになった。豊臣秀吉はそれを、禁教令を発した理由の一つにした。日本では古代から近世にかけて牛馬の肉食が禁忌とされ続けたが、明治時代の肉食の解禁により、牛馬の肉の味は広く知られるようになった。

## 2.4 キリシタン大名と宣教師による奴隷売買

キリシタン大名と宣教師が行った奴隷売買はキリスト教が禁じられた理由の一つであった。当時、キリシタン大名は宣教師がポルトガル人に大きな影響を与えていることをよく知っており、ポルトガル人から様々な利益を得るため、キリストの布教を積極的に自分の領内で促していたと言われる。さらに、キリシタン大名は、奴隷として多くの若者たちをポルトガル人に進呈していたという。

有馬晴信はこの奴隷売買を行っていたキリシタン大名の一人である。当時、長崎における日本とポルトガルとの貿易で活躍した宣教師の一人であるパードレメスキータはインド副王との間で揉め事があった。どうしても副王との破綻した関係を修復したいパードレメスキータは、日本の若者を奴隷として贈ることを考えつき、有馬晴宣が進物として、少年少女たちを船載してインド副王に送るようにしてほしいとジョン・ロドリゲスに要請した。その要請を受け入れたロドリゲスは有馬晴宣の城へ赴き、晴宣は城中の家臣たちの目の前で進物の若者たちをロドリゲスに見せたという。

有馬晴宣は絶対的権力により、自分の家臣たちから自由に若者たちを取り上げ、ロドリゲスやインド副王に進物として贈ったと考えられる。この時、自分の子供たちを晴宣に奪われたくない人々は、慌てて子供たちを連れて、山や草むらに隠れたり、さらに、子供を異教徒に預けたり、また、晴宣の野望から逃れさせるために、涙ながらに結婚させたりしたという人もいた。

キリシタン大名の領国では、宣教師の地位は高かったので、キリシタン大名が彼らの進言や扇動に従って、領民たちを犠牲にして、異教徒への迫害、寺社破壊、奴隷売買など、人の道に外れた行為まで実行したのは無理もないことだったといえるだろう。

## 3. 島原でキリスト教の反乱が発生した原因

天草地方の多くの領民たちはキリシタン大名の命令により、キリスト教に入信して、洗礼を受けた。キリシタン大名の保護のもとに、宣教師たちの宣教はかなり進んではいたが、残念なことに九州におけるキリスト布教は信仰の強制や異教徒への迫害という悪事から距

離を置くことはできなかった。これが後に豊臣秀吉と幕府が発した禁教令の理由となる。小西行長は石田三成の味方として、関ヶ原の戦いに参戦したが、徳川家康の軍勢に敵わずに、敗れたという。勝利を得た徳川家康は江戸に幕府を開き、全国的な禁教令を発した。この禁教令によって、天草地方のキリシタンへの迫害がはじまった。

### 3.1 天草地方におけるキリシタンの迫害

肥後(熊本)の領主である加藤清正が行ったキリシタンへの弾圧はかなり領民たちを苦しめていた。領民だけではなく、清正は有力な武士や武将たちに対して、棄教することを書面で約束するように命令した。従わない者は自分の知行が没収され、拒否した武士は純粋な飢えによる死という制裁を受けるため、出国を禁じられ、親類や妻子が人質に取られた上に俸禄と家も没収されたといわれる。熱心な日蓮宗[仏教の宗派の一つ]の信者である加藤清正は自分の領内で日蓮宗寺院の建立をすすめるとともに、キリシタン弾圧政策を厳しく行った。

有馬晴信は岡本大八事件により、幕府に処刑されたという。晴信の後継者となった有馬直純は幕府に服従し、自分の領内でキリスト教の禁教令を布告した。それだけではなく、直純は自分の家臣に対して、キリスト教に入信することを禁じ、キリシタンである家臣に棄教を命じた。従わない者は知行を失ない、処刑されると宣言した。または領内でキリストの布教や宣教師の影響を断ち切るために、直純は領民に宣教師たちとの接触を禁じ、領内から宣教師を退去させたという。

1614年、幕府が発した禁教令により、日本全国で、キリシタン弾圧が開始された。キリシタン大名で、信仰の篤い晴信の後継者であった直純は、幕府の命令を果たす形として領内の人々や家臣たちに棄教を求めた。民を従わせるために、直純は財産や家の没収、処刑などの手段で脅迫したが、最後まで棄教せず、必死に抵抗する人もいた。棄教をきっぱりと断ることを示すため、自分に火をつけて、殉教した八人のキリシタン武士もいたと言われる。

直純は棄教の強制だけではなく、領内で教会の破壊も行ったという。どうしても棄教しない者に恥をかかせるため、その妻子を裸にして、町中を引き回したとも言われる。ある身分の高いキリシタンはこれを知り、そんな恥ずかしめを受けるよりは、妻子を自分の手にかけることを選んだ。迫害を受けても、棄教せず、死ぬことを選んだ領民の存在は、当時、キリスト教が天草地方の人々の心にすっかり定着していた証拠である。

日向に転封した直純の代わりとして、松倉重政は肥前国の領主となった。組織的な棄教の強制を行った直純と違い、重政はキリスト教を嫌悪せず、領民たちが領内から立ち去らないよう、キリシタンや宣教師を優遇し、キリシタンを容認した。重政の温情と好意によって、棄教した有馬地域の領民たちは新たにキリスト教に入信するようになったという。彼の容認のもとで、キリシタン集団と宣教師の活動は順調に進んでいたが、1625年キリシ

タンの摘発が行われた時、キリシタンに対する扱いは一変した。この摘発により、棄教を拒んで、逮捕されたキリシタンたちは地獄と呼ばれる雲仙岳に沈められた。また、あるキリシタンの子供3人は海に投げられたという。地獄に沈められたキリシタンの中には女性もいたと言われる。

当時、幕府や領主たちはキリシタンを摘発するために、踏絵を行っていた。踏絵というのはキリシタンではないことを証明する手段であり、キリストや聖なる人物の画像を踏ませることである。また、領民とポルトガル人や宣教師たちの接触を防ぐために、幕府はポルトガル人を収容する出島を造成した。

### 3.2 松倉家による過重な年貢負担の強制

キリシタンへの弾圧は島原の乱が発生した唯一の原因ではなく、領民の負担となった重税こそが、反乱が起こった最大の原因であった。飢饉の最中に天草地方の領民たちは、毎日木の根や草の根を食べ、命を保っていたという。こんな哀れな状況にも関わらず、領主らは領民たちに過重な年貢を課したといわれる。大飢饉のため、肥後国(熊本県)では、領民たちは山野に行ったり、草木の根や葉を食糧にして生きていた。この時、耕作も収穫も全くできないので、人々は領内から離れ、日雇いの労働者になって生活費を稼いだ。そのため、領内にある田畑は疎かになって荒れ果ててしまったという。当時の領主である松倉勝家は領民から強制に重税を取り立て、納められない農民の母親や妻子を川の中に作った水籠という物に入れて、拷問した。ある身分の高い領民から未進米30俵を取り立てるために、妊娠中だったその人の嫁を水籠に入れ、責めたという。こうした苛政により、人々は草木で露命をつないでいたが、多くの人が餓死したのである。もう我慢できない百姓たちが集まり、同心した多くの百姓からなる一揆が動き始めた。さらに百姓の中にはキリシタンが多かったので、結局全員がキリシタンになって蜂起したという。過重な年貢を領民に課した原因については、確かな情報が見つからないのだが、ここで一説をあげたいと思う。当時、松倉勝家の知行は六万石、寺沢広高は四万二千石であったのだが、実際には、その石高以上の軍役を果たすことを幕府に約束していた。幕府から与えられた軍役が重ければ重いほど、必要となる資金のために、過重な年貢の負担を領民たちに果たしたと考えられる。また重政氏は、幕府へ年貢を輸送する船が破損したので、三百石を損失し、その分も領民の負担とした。ある日、領民から重い年貢を取り立てるために、重政氏は一人の女子を逮捕して、水籠に入れて、拷問したと。これが後の蜂起が勃発した原因となる。

上記の実態からみると、当時の領主が行ったキリシタンへの迫害や領民に果たされた過重な年貢の強制が島原の乱が発生した最大の原因であったことがわかる。この苛政により、領民たちは長年苦しんだあげく、領主に対する抵抗を決意し、忍耐の限界に達した老若男女が蜂起に参加し、いわゆる島原の乱が起こったのである。

## 4. 反乱の経緯

第三章で述べたように、天草地方の領民たちが反乱を行った原因はキリシタンへの弾圧や領民に果たされた重い年貢であったことは疑いない。幕府が全国的な禁教令を発して以来、キリシタンの生活は一変した。特に天草地方に住んでいるキリシタンは加藤清正をはじめ、有馬直純や松倉重政など、領主の迫害によって、地獄にいるような目にあつた。それだけではなく、過重な年貢までも領民たちに果たされた。こうした苛政により、領主の命令通りに棄教する者もいたが、最後まで必死に信仰を固持して、殉教を選んだ者もいた。

また、勝家と広高は高い収入を得るために、領民に重い年貢を果たし、納めない者に対してはその人の母親や妻子を逮捕し、容赦なく拷問を行っていたという。不満を募らせた領民たちはある場所で会談し、一揆を起こすことが決定された。天草四郎のカリスマや有馬晴信と小西行長に仕えていた牢人たちの指導の下で、討伐軍に対する一揆軍の抵抗はかなり順調にいったが、最後に幕府の強力な総攻撃にあい、全滅した。

本章では、この一揆軍と討伐軍の動き、つまり島原の乱の経緯について見ていきたいと思う。

### 4.1 一揆の最初の動き

1637年、十月二十四日、天草郡の湯島に隠れキリシタンや農民たちが集まり、領主らに対して反抗運動を行うことを決めた。この会談で、益田四郎を一揆のリーダーに指名し、天草地方の村々から多くの農民を味方として集めるために、様々な奇跡を起こしているという天草四郎[益田四郎]の話の人々の間で広めた。やがてその異様な噂は瞬間に領民の間を駆け巡り、領主の取り締まりで絶望している領民たちにとって、天草四郎の話こそが彼らの希望の光となった。そして、多くの領民たちが四郎の説教を聴きに来た。

キリシタンになった2人の領民が有馬村で大勢の村人をキリシタンへ立ち返らせたが、それを聞きつけた島原藩は、怒ってその2人を捕縛し、処刑したという。キリシタンたちはそれを知って、翌日、抑えていた怒りをついに爆発させて、島原藩の大名である松倉勝家の家中の代官村兵左衛門らを殺害したうえ、神社仏閣に火をつけた。この事件が天草のキリシタンと農民たちの一揆の始まりとなった。

### 4.2 一揆軍と島原藩の戦い

十月二十六日、島原藩は島原城の防備のために、二百人の武士たちを深江村へ派遣した。もっと戦力を集めようとした島原藩は島原近くの安徳村へ使者を派遣し、村民たちを味方につけようと、村の主だった者四人を人質に取ったため、結局、村人たちは藩側に味方することを決めた。城方の軍勢が深江村に着いた時には、一揆軍が既にいた。戦いを避けることもできず、城方の軍勢は必死に戦い、一揆勢を村の中に追い込んだ。この時、一揆軍



はある古城に立て籠もって応戦したという。両勢力は必死に戦って、二人が戦死、七人が負傷するという結果となった。籠城する一揆軍の士気が下がるように、島原藩の武士たちは村のあちこちに放火したが、軍勢の疲労を考慮し、一旦島原城へ戻った。ただの農民たちからなる軍勢は方々に拡がり、各地の一揆勢の蜂起は島原藩士たちを驚かせた。深江村の戦いの同日早朝、有馬村から中木場村にかけて七ヶ村のキリシタンと農民たちが蜂起し、島原城へ攻め寄せた。一揆軍に押された島原城方の軍勢は大手口四方の門を防いで、籠城したという。戦いを恐れた安徳村の人々や城下町の住民たちは、避難するために、自分の子供たちを抱きかかえて、城内に入り込んだ。

籠城する城方の軍勢と一揆方の戦いは三日間も続いて、島原城は毎日毎晩のように村々のキリシタンと農民たちの攻撃にさらされた。結局、城方が必死に応戦するので、一揆方は島原城を落とせず、在所に引き上げ、島原半島南部にあった古城「原城跡」を手直し、本拠とした。島原藩士は農民たちがこんなに激しく抵抗できるとは思っていなかった。実は一揆軍勢の中に、関原の戦いに参戦して、生き残った牢人たちが何人もいた。彼らの指導のもと、農民たちが戦い方を身につけていた。また、キリシタンと農民たちには死ぬ覚悟ができていたので、戦いに恐れや怯みは全くなかった。

### 4.3 反乱の始末への決戦

島原城から撤退した一揆方は絶えず蜂起し続けた。一旦在所に引き上げて、原城跡の古城を建設して本拠とした後、キリシタンと農民たちが富岡城に攻め寄せたが、城方が必死に籠城したため、一揆方は今回もまた城を落とせなかったが、この攻撃により、富岡城が大損害を受けたといわれる。一方、一揆方は兵糧や武器などを原城へ運び、そこへ天草各地の一揆軍が合流して、籠城した者のは三万七千人となった。

天草一揆の急報が江戸に届き、幕府は一揆軍を討伐するために、三河国の小藩主であった板倉重昌を総大将として島原へ派遣した。十二月十日、板倉重昌は原城を包囲し、戦いが始まった。どちらも必死に戦ったが、結局、幕府軍が敗退。十九日、幕府軍は再び原城に攻撃を加えたが、また敗退した。戦後処理役として松平信綱が島原に派遣されるという報告が重昌の軍勢に届いた。信綱が島原に到着するまでに一揆を鎮圧できなければ、面目が立たないと焦った重昌は、再度原城に攻撃を行ったが、二時間あまりの激戦で、幕府方は四千人の死傷者を出した。その上、指揮官であった板倉重昌は銃弾を受け一揆軍に打ち取られた。一揆軍に損害を与えられずに大敗した直後、老中松平信綱が島原に到着し指揮を取った。信綱は軍議の上、持久戦をとることを決め、九州の諸大名に大動員令を発した。総勢二万人の大軍となった鎮圧軍は陸からの攻撃だけではなく、海からの砲撃も繰り返したという。これで籠城する一揆軍は厳しい状態に至った。しかも兵糧や弾薬がしだいに少なくなるので、彼らの士気が下がる。何回も強力な攻撃を受けた一揆軍は結局全滅したと言われる。三万七千名余りがこの激しい決戦で死亡したが、一人が生き残ったという。彼

は南蛮絵師として知られている山田右門作だった。彼は幕府方の内通者であったと言われている。

## おわりに

本研究を通じて、島原の乱はどんな出来事なのかを大体想像できるようになった。豊臣秀吉と江戸幕府が基督教の禁教令を発し、棄教しない領民たちに迫害を加えたのは、ただ基督教を恨んでいたからというわけではない。彼らは宣教師やキリシタン大名の勝手な行為を知り、それに対する反応として決断したのである。当初、基督教は歓迎されていたが、ポルトガル人がキリストの布教を有利にして日本を植民地とする兆しを認識した豊臣は伴天連追放令を発したという。そして有馬晴信や大友宗麟などが、基督教に入信し、洗礼を受けることにした理由は間違いなく南蛮貿易の拡大であった。宣教師たちはポルトガル人に大きな影響力を持っていたから、沢山の利益を手にするには、キリシタンになるのが効果的な手段だと入信した大名は考えていたのであろう。

島原藩も幕府も、島原の乱で農民たちの抵抗がそれ程強いとは予想できていなかった。実は一揆軍の中に、関ヶ原の戦いと大阪の陣に参戦して生き残った牢人たちもいたのである。彼らは農民たちに戦い方を教えていた。しかしそのことが一揆軍の強さの唯一の理由ではなかった。死ぬ覚悟ができていて、殉教しても構わないと彼等が考えていたことも一揆軍の力の源であったと考えられている。

## 参考文献

- 神田千里著（2005）「島原の乱 キリシタン信仰と武装蜂起」  
加来耕三 井手窪剛 三笠百合(2014) 「コミック版 日本の歴史 江戸人物 天草四郎」  
朝尾直弘 宇野俊一 田中琢 「日本史辞典」